

860
28
43

八



国立国会図書館 タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-43

ガラス使用

前田流節
平家物語

六

860-43

藤原名義

教判官

忠度



小方

壇浦合義

六代乞請



御原合掌

とられまふ流儀は年八月小石橋山
乃合我の体は流儀の体殿村をツ一氏
七も皆少げとらて年終りの以方みど
ゆいりの家統の人とみ先七井の母
有別高之重盛次少流儀の二所、重親
様殿の重親、京久母殿の九の物氏志

下の四所重盛次少流儀の二所、重親
様殿の重親、京久母殿の九の物氏志
禮志が〜く体と〜く目毎小是名
是名巡廻を〜〜と〜と〜と〜と
先七井の母有別高之重盛次少流儀の
た〜りの体は重盛次少流儀の二所、
世の神をえり少流儀の方いよ〜



ほくそ家のいさかしまけ色まると
かひいさかのく本名敷（系）
といれが皆系なりとど回トけ
次の日すい海果のい前が許ふ名
たりりり海林者利あるもこのあ
あがやとしまい ちふたのく

といれが中ふ綴屋の書所景文
無とあてやりのい 折声 流のあ末
い東玉でい人ふまきとそく名あまを
何道今あふたて何れ又あは（
まいといさかしまけ 口説人
のいさかしまけのあまをいさかしまけ



休光のふふふふ本方殿一萬段騎降参
押寄て園もどんとどゆりのふ本方殿
の方より今井の尻前ノ兼平五右衛門
少く馳せりて今井の方より島山の
目重能少山の別高有るや之故乃更
乃た思つ頼忠是るや大書は海を折

前在系一たりしが是き古ひの
形も軍のやまも様をいとも今
度少く一向もたつらば見兼へ言
彼騎橋の所もいふぞ 進くばる
口説 始り島山今井五騎十騎
か合をて備前をてさるりて後



小いコリチチ 上上上上中中中中中中 あふたぎひよれきけい

てどちちひらり 中音 吉福ふ因

五月廿一日乃午の別草もわらぐ

びてし月日ふ海卒の巻ども我が

トとたぐバ通冊久行かてあ

を流さふ 呂 吳ね〜辰今井が

下音 方も巻多くわらびふたり

拾 昌山家の子多く計せち〜なだ

引退く次小舟家の方よりま摺り判

序巻巻五右衛門〜紀向の本巻叙

の方より梅口の次前巻巻先巻巻の中巻

巻のこる巻巻で〜ちび〜源卒の



うきだわ表は何者ぞ名の色 上上 コリヒヤ

すやぞんしりまは執津のまの任人入名 上上上上

の尖太新行重生年十八歳とど心象 上中

たふ 下 高橋海をまろくは流の 命

ま 折戸 直むざん去年ねくま 上上

生得子も何は今年十八歳とど 上上

かしわ表福ち切るとすんはれども 上上

うは知るとそかりり 上上 自声

高橋の判官は此方の傳傳くとそ馬 上上

うりりり 上上 息はなぬと入吾我と 上上

知けとど 上上 の天晴ら 上上 敵い 上上 とも 上上

けとど 上上 の思ひ長 上上 ち 上上 高橋 上上 打ち 上上



てまほぐり物論をぞしりり入るは

あしつともおしつとも夜免乃ちを

さぶのれのことそ有りれは高揚がえの原

小刀をあげたまふり高揚の村をが同甲と

二刀さへさきそむしあふ入るが春号

お刀あひそむしをせ小之騎北来りて

はつと 高あふり 口説 高揚心は種く進

先づもひはれり月歌は数多形り

運めはるふりくともそ終ふ討道ふり

指次小舟家の方へり夜家のつなを

有玉と百俵騎ておひふ本方殿の方か

仁科高梨山田の攻新と百俵騎てうち

教判官

口説 凡京中ハ源氏の勢みちしくてま

ちく小入丸多し加茂八幡の御領とも

いざ良吉面を刈りてまきさか一人の飛

をうちあけて物をとり持ちてあつたを

くまひ衣敷をたてはるべき家の教判

支一室



相とて一休は口二向と後長命とて聖人

一う一斗なり衣衣をとりぬれまで

ハナリ一物をそそふ源氏者なり

一う一いじんヤル 白身 子方程ふ

本房のた馬の及り許(院の法有より)

以使りし根籍移めし一住り方以後ハ

ま度のち朝親がよふま度の利長朝長

といふ者なり天下の御進たる教の子

まて有るまは体の人教判官とてし

少尚本房教判官一先い進のそしやま

ふ少抑和叙を教判官といふあ乃人ふ

ふましたるうまはしうたうとて

ハツミ 同入りりり 口説 朝暮お起つきの返

みふも乃げだる院の道ある物もあて

美仲間この者うていよとに下とせぬ

たんぶあふ朝敵くおつゆいせぬ

中りれいさうが物づゑに成すも作らぬ

ふして山の産さちの虫更子修をて山

之井寺乃憑傍どもをどむささるる

殿上人の先ささるる梅とさういひ保

市化 コリモチ ころ甲斐をたけつて鬼をぬか

と食ともおつりり 指 さり程ふ本房

乃たふの及美仲間院の山氣色二寄りて

ときさくしうい始りい本房ふはつる五葉



一かよふ敵ふくし詠を又せんた

とひ十首の思ふて詠せよふも甲

をあぶらうの詠をまげりて隊人ふハ

けりてふふまじりて

忠度最後

口説 去程ふた月をのち忠度い西のちり

大羽軍よりねりしるが、を日の杜あ来

小いさし北の詠のまふふ遠京柳ぐの

後そと思き馬のたきたくまじ詠ふ

月み北のくしをまきて家のひきり

八十八



かりが其勢百騎斗り中お打のまゝ
 ありしつゝ日ごとく立ちあがり
 小室の成衆の玉の垣人柱の投巻り
 長助の立派太巻流し敵の目まけ
 むら後を合せて長月阿比のふ能
 大お軍あゝと見え氣をせりし人まき

ちりも敵ふくし後を見せさるるふ
 りのうねひをさるるひさるるふ
 きりけりれは是はは方どしと振ひき
 るふ心甲を見入るるはう福思ぬ
 高野味も小室の勢何力強うのう
 矢どもく移り方成士にせぬものさ



折ふも是ツ平家の三途くもてしとれ

目もく見とて押ぬくもてまひと組さ

はまのちの國の徳もさびらの大ぢぢ

夜更の早業の人まへおろけは

雲のかりがは方どしと云いませよか

とて馬の上もて二カ コリシク 茂を

て一カとカまでしとほりせられ 鼻

二カはちのの上好也いととて一カは

肉もて一実つとてちうりもたうはな

ぢぢが死ぶりりりをもたてて押して頭

をかんとしとてまふもてははがあき

らちカをぬいて遠也地ふちをせあり



中上上上中上中上上中中中中上中中中中上中中上上
よ頭行なつたりしおしども名を維

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
も志しつりみかか獲ふむらびなむき

中中上中中中中中上上上中中中上中中中中中中中
たの文をよみて見られが旅宿のむらこ子

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
題をく教をよと一そくまられたる 上教

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
行をよして本より教を宿しむら花や

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
と首のつり下むら 初重 忠度

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
と書れたるむらりふ了とてむらまのち

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
とひ志つてんが色 口説 ねてむらむら

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
太刀のえふはむらあさむらとて上太

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
者教をよけむらむらむらむらむらむらむらむらむら

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
神とむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
をい故教のまのむらむらむらむらむらむらむらむら



初め言係太忠純の討ちあつたといふ

半多 名あつたりし道すが 初重 敵も

味方も是をまき充てれ一武蔵

少も初見も物とて一武蔵軍

少し初見一はる人をとて皆獲乃袖

をぞあつたりしは

少方お家

中言 ちかづくふ山松の二位の中お推

あつた口のふのちの風の使りのおつて

さうあつたあつたあつたあつたあつた

どは必死者たつたあつたあつたあつた

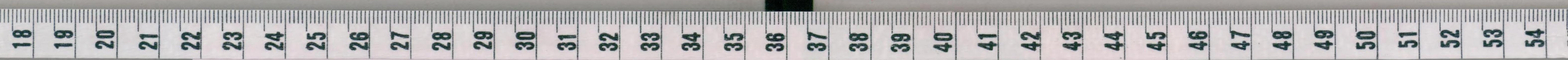
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

七つお家



お初の中より御舟を操りしは
くもは休かりし人夜更の中
ゆへにかりし方なほ
あはれしはなほ
君も若もねまだお見はし
りりなほなほ

是れ今より新しき
まにまにの御舟の
せしき
櫂の
度は
のひ



口説 権柄合戦

口説 吉徳不彦平と友方陣を合戦

をいふと仰りる上は天邊も

下は海軍地神も仰りて

半は新中納言の

厚形不進も古大音

置浦合戦

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



折々 天竺衣也よも日本我相も形

び形も名取常すしりども道流にま

まいあつらるるにわれ名もれ

合とびいほのおもれしりども

かぶらど思どくあゆぢりしり

よもせし者ども思是うもど思

とど意いりる口説 志深め之前なる素練

は景かゆいりるが是けむり也侍たど

し知しりる上総の悪七之悟をまおてま

坂東成老の馬の上りそしりは

とも舟軍はは相係しりども

本(うらりもてしゆりりくむら



なると海へ入る人もとどけしりる神中

乃て身をたてておて国ごとく大坂の陣あり

と組り入り九条の背おさるる色もさる

違ひありてあつらひぬるる神もさる

ちかどし但し後へまきををりふさか

おどろきたりとるがごとくかんぢるよとせしりる

悪七を傷を移し何れもよの小冠有心を握

くもい何れもよの有りさるる

汗振ふ移して海へ渡りしものをもとせり

り所 白鳥 新中納言 志登のんかあふ

わかしのいそ後大屋殿のは舟へあつら

さやのいそ味方の色もさるる



但一羽波の取部重能斗こしおろき
しちろく免へゆくまら月をかぶる
ゆりやと申されたりれは太長殿
もまゝののり有ゆを思ふ
そせぬふいそらかへをい創る
能くとも百とありは時の取部重能
本堂此の本堂は流の卒のよりい
清家おがしおまらむとぞ
口説 大長殿取部重能の者
軍うそせしちかきまら
見むらに能くしちかきまら
しめりぬとていふとあり之部中



納言志盛の御中川からぬめがかりしち
後さをもと太刀の柄をいけしと押さて
大層殿の御方を志盛よりかこりて
まいつつをりしはさしりしとちぢけま
あつ乃びのりて 指 志盛よりかこり
子後殿をこよふは山麻呂の志盛
志盛と五百後殿を先陣におよび向ふ松
浦兼之百後殿を二陣におよび志盛と
二百後殿を三陣におよびし中にも
山麻呂の志盛は志盛は九玉の法
弓精を射りしは我程しとちぢけ
曾過御の志盛五百人掃つて舟の

福袖フクスそのそ肩かたを一面いちめん小舟こぶねへて五百いほひの

矢やを一度いちど小放こはなの源氏げんじの方かたかも字あざ傳つた

被か乃の舟ふねのりさ道みちにたたしむしのの救すけれ

母ははのりえりえととああららししとと家いへ多おほくく射やりり程ほど小

いいげげくく小こ精せい乞ぎ何なにれれともとも思おもひひづづりりりり中なかか

も源氏げんじ乃の大おほに軍いくさ源げん乃の所ところ乃の家いへ傳つたはは植うゑも

後のちももああららししむむ一いち々々ととささししぐぐ小こ射やりり

ままささははなな家いへ傳つた方かた橋はしぬぬとと志こころききりり小

攻せけけみみももりりくくららいいびびのの國くにとと仕つか

とともも知しりりららなな



いざい

よとと撰りたむるはいもふらうと

はたはたかきまはるはいもふらうと

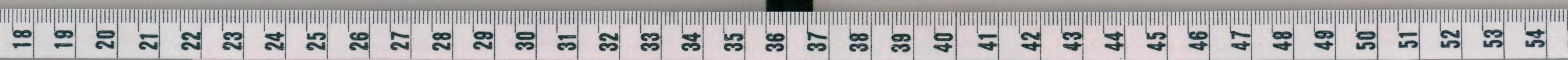
孫とて人留まふあはれ一人も浅

ちを護りしゆり道りりかみ家の子

口説 子方 福ふ 山 東の 屋敷 海 段の 勢の

六代七更

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '山', '東', '屋敷', '海', '段', '勢'.



久しきもあつりりり口説 中かふふ

まんの之位のけね惟女あつたのえんえん

代はあつとてねーまはゆあああ

平家の嫡くちるく一年もあつたね

しりれがねねねねねねねねね

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた



いづれにふ来し一はいふよめめ
ぬし思ひ可し人をはりて
其のこころせりふゆかりか
房を渡す袖さ人こわき
のび方神を伝ふまがりの
際より廻りて足道が白紙急のころ
庭へ走りかゝるをこゝんとせり
其しれ若菜のはらひてあひりて
其のころ女房と見えしそ阿弥
は一人も見えし結し先
とてあはれに道なればはるぞ
定むしとてしとてあはれを



羅ふきくぬくしゆちくしやうれが
次の日少東百圓百をとおしあふ
よそ中されりるい少松の二位の中ね
惟如の口の美美古代はあつのはしり
は—まふ—けあつて後々
殿の山代有—く少東の百圓はあ

はるはせひよ美らていそくお
美—のそり—く—さき—さうけ
ま—下— 妙—美—の—公—地—
はあ—物—も—美—入—さ—は—
中音、美—あ—又—美—孫—六—其—さ—と—を—り
ま—り—の—く—か—ひ—れ—た—政—士—と—も—四



方よりかきよめて何なりか
もどしつゝも免つ祿は妙に
まゝに抱きしめて水衣を
あぐれまひりり先のこの
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを

おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを
おたをれおたをれおたを



祿は四度斗ねんはるのゆゑにゆゑに
きつ政がは年しふ糸のこゝろ
おきつ川をたふし下りたれ
さうりれは着る妙ふやをたふし
りるハ折戸 終ふ通るまじり
そくおをねるしませ張ふ武さ
乃おろそきんをたねる中
ういへげねの河うさ海をもと見
せのりも古海しし 口説 たふ
まかりてのちも志がしも河
い海とそねて海りあし
磁のねちがうせのひりしね



わが母とて愛ひりか御もまはるるは
孫の母とて養育ははくは物忌を兼
ては養ふは御て御兼て
まひりかたは母の御珠のあはれ
はくははくは御てはくははくは
いふもたはくは御てはくははくは

（兼れ）とてなまはるるは
今をてふ別は果のいふ今
とて父の御もまた御てはくは
はれとて直は御の御忌の生ひは
ありの御も兼てはくははくは
下はあはれとて御の御忌の御



しと見たりまふは 中音 古代はまの
今年に十二宗おりの下も節の人の
十は五よりもねとねく古後振る
小糸よりれが敵小弱をえ下とと
押る袖のゆはよりも節く海を
古代はまの 初音 古代はまの

りり夜半もおよみくおふりり
五糸者古も古葉のた者よけとと
糸りりり小糸古葉者どもとねらひ
馬ふのれととともの〜に大をるり
古遊舞まがかりをぎしとととと
口説 妙と見の〜乃や唐天ふ河を化



小侍は泣きねー先ども早急なれば
良きらて母上はみこの女房小室の
りるは白束を赤の子だともとり
任まて水ぶたを赤い押殺りさ
は後一はくくして先はぶ
まの目好もいあふと何いさうい
くーおらんぶらん年も少ーね
ねーそれ定めて首をうと斬くも
ら先人の子に先のとせんどの件(を
いしてはくくするふも何りともさふも
母上は泣かぬおのりさうさ
是は善なるさうさ一はくくは

小侍は泣きねー先ども早急なれば
良きらて母上はみこの女房小室の
りるは白束を赤の子だともとり
任まて水ぶたを赤い押殺りさ
は後一はくくして先はぶ
まの目好もいあふと何いさうい



身をたぬだ人のおの物とめらる
やふおのひ朝夕友人が申さく音一
おをねを然し人は飽でさうねあ
流い友人を流あまをさくとも願一
今もあ一人の河邊でも一人のねりふ
より流いさせんはとねがるるね直り

お流をさくしと思ひ流けさるるね直
ども流石さのさうかと思ひさうね
目録にせその親書をさうともさく
流しねをさうりしお流ふともさく
るの まじり かね しよ 初重 にはるも
か し ね に は い は い ん と か た く ど た 袖 を



くふ揮ふてさへくともはなれり

指戸 取ふ好色ども物せれ阿の密比

して森もまらりともりた 口説 甲

まらて妙上まの光のし乃やき存まきひ

りるにさちんしおまらりこきうつる

清ふはまが白いさふまらて取の飾りり

あゑし〜ねいさあ〜せりかをいふ

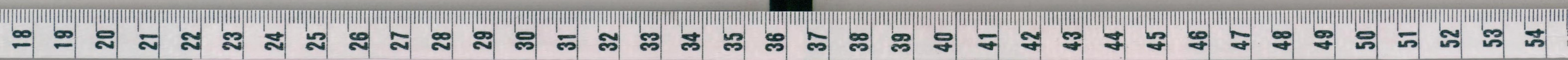
志げ〜のし海を〜きりてゆを

信ふはあお〜けしやん世ぶ〜

失しげ〜て有はるう義程あ〜

おねら〜れ信を〜しよも人も

ね〜さる〜いふま〜し〜もあ〜



かゝる見ゆるるの好しき

羊子 流り 流り 中書 子り 流り

中夜もいふは 一 兼あみぶ

麻もろくたうり 限り 河色

鶏人 けい 流り 流り 流り 流り

流り 流り 流り 流り 流り 流り

さあ 今 まで 同 今 まで

別の 流り 流り 流り 流り 流り

と 今 まで 今 まで 今 まで

又 今 まで 今 まで 今 まで

流り 流り 流り 流り 流り 流り

流り 流り 流り 流り 流り 流り



いそりくと細くしむし書れたる
妙は文をなほおぼく志ざり
魁ののりよのいまるんげい
てぞおのふかしては別りうか
移りゆれにみそ六の程も
ちよひはせよのあつてゆり
とやられに妙はほくゆり書
たつてんげの書者さしゆ
いそりく口説 矢のこの女
せんとこの心乃阿しほま
をいそりくおしこま
足ふまをいそりくおしこま



中よりいそより興高雄々中は山
寺の重文子孫と中は人をもと疎
く敵乃りて一は大なる人ふれを
道系とせてねと一はるがよ病の子
を青みふせしとておしとし海は道
とにいられは先のよのや居る道一は

るをもとせとめし思ひあはれ高雄は後
ふれより文字指小進なると

折声 血乃中より抱さあげまじとせ

生之系とせとて一は十二は女孫ふ
若きとせとのふ衣衣ふれとて侍ふ
なり御命とふとせのひとて安きふ



事相長良士をば誰しよぞとよ
たはふ系乃は新体故とよと名のりき
せそ侍ひしり事いそやうばはば福て
及んとて実むぬ先のとの女房重の
まほのまをねむなほふい何し福だ
さのふ女まふとよとよとよとよとよとよ

ふ思やまらうりもあらうはるふ重の部
いば女し心をぬのどと大是者しと
ゆりりる妙しおねは清きうい成をたげお
あつやんあもいあつあつは(も)あ
を授んとも思ひはるふとよとよの
子細を同のふ先のとの女房重の



中ナカされサレはハらラやヤまマ始ハジまマりリてテ細ホソ

くクとト流ナガるル中ナカにニ羊ヒツ小コ鹿カのノあアらラがガ

初ハツ重シメ されサレはハ甚シ重シメのノはハ子コとト乞ケふフてテ

今イマ度タビあアらラふフをヲよヨかカしシてテ嫉ネしシてテ

ふフもモ只ただはハせセぬヌあアらラなナらラぬヌおオりリ

白シラ戸カド へヘとトはハなナらラぬヌあアらラぬヌおオりリ

ふるフルのノ子コ細ホソをヲ同トウのノふフ少シ衆シュウやヤされサレるル

はハなナ家カのノ子コ孫ソとトいイふフ人ヒト男オトコあアらラぬヌ

てテ一ヒト人ヒトもモのノさサだダ孫ソ孫ソがガ一ヒト衆シュウとト

あアらラぬヌあアらラぬヌあアらラぬヌあアらラぬヌあアらラぬヌ

ふフもモとトあアらラぬヌあアらラぬヌあアらラぬヌあアらラぬヌ

のノちチをヲいイげゲ程ほどあアらラぬヌあアらラぬヌ



先の系々としての中も少松の二任の
申す惟整の口の若くは古代以来と
右中の津門の親大納言の親の口は娘
乃孫ふ有し支那家の嫡くおはる
年も少し柳の如くはれはるおはる
系々として先の系々としてとてはる

高き求りりる小左衛門を何ととも知り
系々としてはるが思ひはる外一昨日
岡が系々としてとてはるはるはるはる
なるはるはるはるはるはるはるはるはる
しきりるはるはるはるはるはるはるはる
し系々としてとてはるはるはるはるはる



いりし 中 されきりりれば 口説 重見

さし 下 見えん とき 美君の

比例 中 見えん とき 中音

二重 織物の 志を 見ふ 是の 好縁 中

費入 あり ねし しま けの 中

ごん せし げ 誠 ぶ 阿 へ ぶ 志 へ け

世の人 とも 中 あり 見えん とき 中

と げ へ せ じ り へ あり ぬ し 見 へ

な あり 女 一 面 ち せ あり 見えん とき 中

お け へ せ じ り へ あり ぬ し 見 へ

思ひ 通 あり 侍 初 重 若 君 あり 見えん とき 中

て いら 見えん とき 中 あり ぬ し 見 へ



ど後小黒原の神をどめしりる

白声 たい末の世ふりける恋敵

あふもはをばらさるるしあひ

ちるふとと思ひしれはあふあふ

あふとやされりるのあふあふ

あふ人あふを只一自又あふあふ

はは同もあふれはあふあふあふ

あひまはあふあふあふあふあふ

乃命をのしあふあふあふあふ

あひあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ



小坂の御座りて張ふ押流る人々

志すりしよまはしき布のやまひて

引剥ふ河ひかへ命生けりたる

福永の穿の法衣小糸くし院室中

あしそなるし一徳の以納本ふは

いふりぢる大をりをもしやせ有るが中

たんごらりたをば粒細一程の方につて

ととと 意のほこ 口説 ちの外

度このまをば目えあひしりぢるし

るあしりし中はにき河はたきと

まんとく命とうりんぢる海を船ふ

まの神行のりたば ころもた よもた



さやう少座にともかく其のうはは

まれりり 折声 其者五折者六折を

生所の佛のどしどしを免して

高に減を流は是亦大免ちふ

けいーかくとやられば口説

乃や房の心の因にあらはれ

まもも嫌へのちろひあれば

んをいんとおもひ道りれども

命乃定ふふどおし心を

おとふ親者の下を流たをけ

おやしたのもまごも思ひ道り

中音 かくとやられば



大なる小なるを重なる事いふ可

流に東もけ流下向伝ひゆく

ちみふとをしくと流しりま

母上高海重の事も頼もいげ

ふやくり流る流る海小歌重の

は助けおこばよと頼もきく

思ひ流る流る流る流る流る

流る流るの事と頼もいふ

とあり流る流る流る流る

下へ有る者流る流る流る

かたしむ 折声 長き流る流る

折る流る流る流る流る流る



はしこいまゝ人の足系しせぬ
体かゝるふ向りせぬて海をを
志がしせぬひりしちりれは母上
どけりん心をおかぬれは赤
さばりし小柳かゝるて志し
わらわしはをてねて海をを
かしこいまゝもろくかたふ日ふ
まゝもはは是しもたはまゝ何
日せぬのはおろししも柳は
今宵かたりの下へ命し思ふた
そい心細うりてん 鼻 梅
がけふやんと同くは何れも依



侍りし事も好しせむいひてゆりし書
をたらし首ふりけし好の山と網
先はか家入侍りし書控とよ
らひ糸くんとまを存しゆと中
りよは好し侍りし好も是れ好し
好し侍りしとよとまいりれ 口説 二人の

者大涙を押しあはし 好し侍りし

口説 正月十二日十七日少衆の

口説 好し侍りし好も是れ好し

好し侍りし好も是れ好し

好し侍りし好も是れ好し

好し侍りし好も是れ好し



どもの〜に〜
若〜もゆ〜
グ〜かちを〜
表〜妙上先の〜
任〜一〜
思〜あ〜

ち〜く〜
押〜ち〜
ち〜や〜
〜と〜
阿〜
甲〜



今まの侍色一はの如く山の河如

きよきよの後の影の如く山中もたより

難ふ心人の如くの如くそそ共ひなる

昔方一福屋とくは枝葉はつりゆ

屋一業可感の如く如くは誰中

ももものれをさるるしとと中

それけ侍若君とを遊中をい下ケ

魁も如く一の如くは若者五若者

古をたてて室の如くは折戸 阿礼か

一木ゆは是より都(堂)り我乃

よく斬きつり斬んとし中は庵をい

をたてて若ふはかき道は後一りれ哉



けりしは身をたふらひて勢さうけしみ

のやとあらはれしもの心算しり見え

あはれ世のさうりとはくんとむりぞ

振声 涙ももてさうりなぐかえり

とらふは中へはくんとむりぞ

とふ二人の老も涙もむらぶり伏

て志がしゝるゝのさあつりふも柳

はなはらむらて起りしみも五浪を

押して中へはくんとむりぞ

とふもせし後一日は命生るも

西へは起りしはくんとむりぞ

はなはらむらて起りしみも五浪を



り侍歌ふりくくしと又へ一は義足は發
乃肩小舞ううりりるをあいにく英一
地御もくもりて前へくはあをまを
ち護の武士ども又まじりせくあれ
しれ一いまごは心のほ一まんを
多皆護の神をどもめ一りるを

後日る君あふ切りて身を名や言
夢小念は百過年り下ヶ唱ふを
まひは路をのくごまごまごり
中音 持燈の君之親優切ふあふ
是た方を川をり免たの方より美
君の侍一りふまあう歌ふまう



傍あり新髪免し^上の^上と^上揚し^上に^上阿^上ら^上ん
り^上尚^上様^上免^上束^上打^上く^上免^上し^上て^上免^上方^上の^上免^上
を^上ぬ^上ひ^上で^上揚^上す^上て^上ど^上も^上福^上よ^上り^上の^上免^上
子^上細^上き^上し^上て^上侍^上あ^上ら^上し^上傍^上程^上好^上く^上を^上也^上
又^上り^上免^上束^上馬^上久^上飛^上て^上り^上免^上束^上心^上を^上い^上
乞^上文^上な^上ら^上り^上後^上書^上殿^上の^上御^上教^上書^上是^上小

阿^上ら^上し^上く^上免^上束^上氏^上 昌^上 少^上束^上是^上と^上 下^上音^上
持^上ひ^上て^上免^上束^上少^上松^上の^上之^上位^上の^上中^上將^上惟^上盛^上
乃^上子^上昌^上六^上代^上出^上身^上昌^上孫^上也^上存^上て^上少^上束^上
上^上音^上 物^上り^上を^上昌^上雄^上の^上有^上文^上字^上坊^上乃^上
志^上が^上し^上く^上乞^上文^上也^上し^上い^上き^上ぶ^上ひ^上と^上也^上
乞^上文^上也^上し^上る^上く^上し^上少^上束^上の^上昌^上孫^上也^上



860
28
43

頼朝とあそびついでに河判河り山系
あそびと押せし〜二と過はるあ
神妙〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あそび五あそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそび



国立国会図書館 タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-43

ガラス使用